

うらかな春の陽気が、クレールの町に降り注ぐ。  
目指していた家の前に立ち、もう一度だけ地図を確認してから足を踏み入れた。  
花壇に咲く草花は、陽をめいっぱいに浴びて、まるで顔を綻ばせているようだ。  
ドアベルに手を伸ばす。  
チリン——。  
涼やかな音が響き、静かな町にやわらかく溶けていった。



ドアベルが鳴ったのは、昼もだいぶ過ぎたころだった。  
玄関まで駆け足で向かい、扉を開ける。  
そこには、見覚えのない男性が立っていた。

「はじめまして。薬屋リーファで間違いないかな？」  
「ええ、そうだけれど」  
「よかった。今日からこの場所で働くことになりました、庭師のツバメです」  
「ああ、あなたが！ 私は薬師<sup>くすし</sup>のルルよ、よろしくね」  
「うん、よろしく」  
「どうぞ。中を案内するわ」

彼を歓迎するように、扉を大きく広げた。

「お邪魔します」  
「ここは待合室ね。会計所のすぐ横に診察室への扉があって、こっちは居室<sup>きょしつ</sup>へ繋がっているの」

ふたつの扉のうちのひとつを開くと、廊下が続いている。

「ここを進んでひとつめの扉があなたの部屋よ。荷物はそこへ置いて」

「わかった」

薬草園の管理をするために、庭師は住み込みで働くことが多い。今回もそういう契約となっていて——つまり、私たちは今日からこの家で一緒に暮らすのだ。

「わあ、きれいな部屋だね！」

ベッドと机、小さなクローゼット。  
そして、日がたっぷり入る窓からは、薬草園がよく見える。

「以前は父の仮眠室だったの。あまり広くなくてごめんなさい」

「十分すぎるくらいだよ。庭が見えるし、ベッドも寝心地がよさそうだね」

「布団は干したてだから、きっとよく眠れると思うわ」

「わざわざありがとうございます」

「いいえ。雇い主だから当然よ」

「あ、でもお父さんの部屋なのに俺が使ってもいいの？」

それは当然の疑問だった。

「……両親は一か月前に亡くなったの。だから気にしないで」

「そっか……。部屋、大事に使わせてもらうね」

「ええ。次はこっちよ」

荷物を置いたツバメとともに、再び廊下へ出る。

「ここが調薬室」

「鍵？」

「毒のある植物とかが置いてあるから、薬師しか入っちゃいけないの」

「そうなんだね。じゃあ採取した薬草はどこに持っていけばいいかな？」

「診察室に置いてくればいいわ」

「わかった、覚えておくよ」

ツバメは大きくうなずいた。

それから、薬草園への扉が見えてくる。

「ここが薬草園よ」

「見てきてもいい？」

「もちろん」

許可を得たツバメは、薬草園に吸い込まれていく。

私は入口で足を止め、彼の様子を見つめた。

なんだか、浮足立っているような。

「すごい、種類が多いなあ！」

「母が庭師だったのだけど、野菜とか香草とかも植えはじめたらこうなったみたいよ」

「たしかに<sup>しょくようか</sup>食用花もあるし、薬草園というより菜園みたい。あ、これって隣に植えていいんだ……」

「どういうこと？」

「植物って植え合わせがあるんだよ。例えばマリーゴールドと野菜とか」

「それはどんな効果があるの？」

「マリーゴールドがね、虫除けになるんだよ」

「へえ……知らなかったわ。ツバメは本当に植物が好きなのね」

「あはは、そうかも。ところでルル、なんで入口から見てるの？」

「……虫が、」

「ん？」

「虫が、いるでしょう」

「ああ、そうだね。もしかして、苦手だったりする？」

彼の問いに、私は目をそらしながらうなずいた。

「あれ、でも虫って薬の材料にもなるよね」

「そういうのは平気なの！」

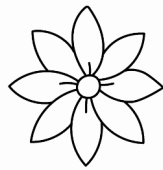
「……ふふっ」

「わ、笑わないで！」

「ごめんごめん。俺はね、生魚が苦手だよ」

ツバメはこちらへ戻ってくると、人差し指を立て、笑顔で言った。

「ね、これから一緒に住むしさ。お互いのことについて少し話そうよ」



(自由 RP マーク)

「じゃあ、次の案内をするわね」

「お願いします」

それからキッチン、トイレや風呂場などを案内し、二階へ続く階段までやってきた。



「二階には私の部屋があるわ。そもそも大抵のものは一階にあるから、あがることもないでしょうけど」

「そうだね、案内ありがとう」

「どういたしまして。今日は移動もあって疲れたでしょう。夕食のときに仕事の話をするから、ゆっくり休んで」

そして、右手を差し出す。

「それじゃあ改めて。これからよろしくね」

「うん、よろしく」

私たちは握手を交わした。

これから、新しい生活が始まろうとしている。



を押して、次のシーンへ進んでください。